

印葉図をめぐる埋もれた博物学史

——近世日本における「印葉図」誕生に関する考察（中）

今橋 理子

【目次】（承前）

2 自然標本と絵画のあいだ——印葉図とは何か

（四）日本における「印葉図」研究史の端緒

（五）腊葉と印葉図

——「日本最古の印葉図」に関する新知見

①「日本最古の腊葉標本」の再検討

・佐竹義文著『花葉集』

・京極高永室・梅寿院旧蔵「京極家本押し花集」

・諏訪高島藩士・渋江隼之丞の「渋江本押し葉・押し

花」

②十七世紀日本の腊葉標本・印葉図に関する新知見

・前田綱紀著『桑華字苑』と「丙寅旅中雜記」の印葉図

（以下、次号）

2 自然標本と絵画のあいだ——印葉図とは何か

（四）日本における「印葉図」研究史の端緒

本論第1章（『学習院女子大学紀要』第二十号に掲載）ですでに述べたように、日本における「印葉図」誕生の歴史認識については、なぜか理由が曖昧なままに「十九世紀に誕生した」という文脈で、長ら

く植物学史では語られてきた。そしてまた美術史においても、同様の流れがそのまま歴史として語られてきたことは疑いない。

おそらくこの文脈は、日本近代植物学の礎を築いた本草学者のひとり、伊藤圭介（一八〇三—一九〇一）などが、自らの観察にもとづく植物図譜制作において、しばしば「印葉図」技法を使用していたことなどが大きく影響したものと思われる。伊藤が若き頃より属した本草学サークル「尾張嘗百社」は日本の植物学史上において、最も頻繁に印葉図技法を研究に活用したことが博物学史的には知られている。まずはその辺りのことから従来説をまとめておこう。

管見では、日本において本格的に初めて「印葉図」の歴史について論じた論文は、岡田要之助「我國の植物印影図に就きて」（『植物及動物』第十一卷第八号、一九四三年八月、三〇—三二頁）^{（註14）}とみられる。すでに七十五年以上前の論文であるが、植物学史上において現在でも語られる印葉図に関する主な見解は、岡田のこの論文に基づく点が多々あるとみられるのである。ところが、なぜか岡田の論文に言及している後続の研究は、ほとんど見当たらないと言つてよい^{（註15）}。よって、ここではあえて紙数を割いて岡田の論旨を紹介しておきたいと思う。

土壤微生物学の先駆的研究者として知られた岡田要之助（一九四六年没）は、東京帝国大学植物学科で三好学（一八六二—一九三九）^{（註16）}

に師事し、その後東北帝国大学教授また東北帝国大学農学研究所以代所長となった人物である。岡田がいつ頃より印葉図に興味を抱いたのかは定かではないが、この論文（以下「岡田論文」と称する）を読む限り、かなり長い時間をかけて岡田が印葉図について情報収集していた形跡が窺える。二段組みわずか三頁（約五〇〇〇字）の論文ではあるが、前書きを含めた五つの段落の中で、印葉図の歴史を考えるための大事なポイントを、岡田は以下のように大きく五つ指摘している。

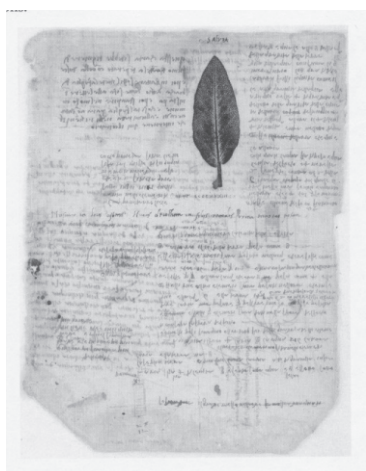
- ①「印葉図」の概念規定と、日本・ヨーロッパにおけるその概略的な歴史について。
- ②まとまった植物図譜としての印葉図は、日本では幕末期の安政四（一八五七）年に尾張（名古屋）で刊行された『真影本草』（石黒通玄正廉・戸田五郎兵衛壽昌編）が最初ではないか。これら尾張本草学に関わる印葉図の多くは、武田長兵衛氏の杏雨書屋（現在の武田科学振興財団杏雨書屋）に蔵される。
- ③我が国の印葉図は尾張地方で広まり、その制作のきっかけとなったのは「キニホフ」Johann Hieronymus KNIPHOFの *Botanica in originali, seu Herbarium vivum*（『植物印葉図譜』）であろう。同書は一七三三（享保一八）年にドイツで初版が刊行され、刊行物としては（世界的にみて）これを嚆矢とする。同書がいつ日本に舶載し、誰の所蔵となっていたかは定かではない。
- ④飯沼慾斎（一七八二—一八六五）の著『本草図説』には「幾尼福氏印葉図」の言葉がしばしば見られるため、これを手近に置いて参照したと想像される。飯沼慾斎が尾張本草学の一派と浅からぬ関係にあったことを思えば、それは想像に難くない。また別に宇

田川榕菴（一七九八—一八四六）筆写の『キニホフ植物図譜』（一卷（武田科学振興財団杏雨書屋蔵））がある。

⑤キニホフの『印葉図譜』の存在は尾張本草学の人々の間ではよく知られており、したがって早くよりこれを模した石黒・戸田らの『真影本草』のような図譜が作られ、ひいては後年の明治期における真影図（＝印葉図）にまで影響を及ぼしているのではないか。

まず岡田が当該論文の題名にもあるように、「印葉図」ということではなく、「印影図」という用語を使っている点に注意しなければならぬ。論文冒頭、岡田は「印葉」に関して、「植物の形を图示するに実物に墨を塗り紙に拓してその形を表す方法」と規定し、さらにドイツ語「*Naturselbstdruck*」や英語「*Nature-printing*」の翻訳語として「影印法又拓写法と稱^{よな}へる」と述べている。つまり「印影図」という用語を岡田が論文題名に用いているのは、あくまでも岡田独自の用語なのである。本来「印影」とは、朱肉などを塗布した印章を紙などに捺したその跡を呼ぶ用語である。従って厳密には「拓本」的な方法も採用される「印葉図」を単に「印影図」とは呼ぶことは、完全には正確とは言えないだろう。だが岡田は論文後半で述べるように、飯沼慾斎が著書『本草図説』で「キニホフ」の図譜を説明するに際して、「印葉図」とか「幾尼福氏印葉図」という言葉を使用していることから、あえてそれらと明確に分けるために「印影図」という用語を新たに用いたものと思われる。

また岡田は、論文を発表した一九四三年当時において、印葉図という方法が「今こそ余り流行らないやうだが中々面白い方法で、腊葉と写生図の中を行くと謂はうか、例へば植物の葉脈の塩梅など普通写生図では様に表はし難い微細な点まで、極めて忠実に現物の儘も再現出



【図12】 レオナルド・ダ・ヴィンチ直筆
『アトランティコ手稿』より
「セージの印葉図」 1508年頃
アンブロジーアーナ図書館蔵

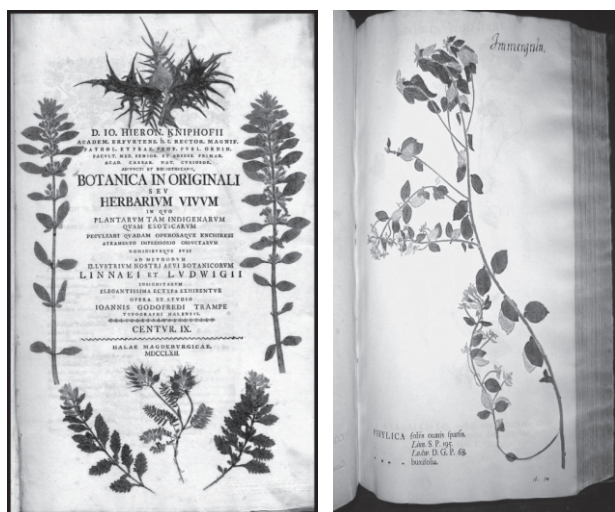
来るし、その外色々便利の点も少なくないから、之を適当に応用したならば効果的の場合も多々あるのではないかと思ふ」^{〔註17〕}と述べ、植物学者として印葉図の継続的な有効性についても示唆している。そして続けて伊藤圭介門下の博物学者・田中芳男（一八三八—一九一六）を例に出し、田中があらゆる物をコレクションしようとした徹底ぶりについて「田中芳男先生の如きは縦横にこの方法を駆使されたもので、各地に出張の際はもとより日常触目の品物万端何に限らず撮写を施し、参考として保存された。その一生に先生の手にかかった数は大したものだったらしい」と、「印葉」という記録方法が、極めて応用範囲が広いものであったことも記している。さらにヨーロッパにおける印葉図の歴史について、「二百年位昔から相当立派の仕事が公にされて居る」とし、論文の後半ではレオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二—一五一九）が「影印法そのものに就いては、古く既に之について記述していると云う位で、別に事新しい技法ではない」^{〔註18〕}とも述べ、世界的視座に立つてみれば印葉図法がすでに長い歴史をもち、広汎に用いられてきたごく一般的な植物標本の制作方法であったと位置づけている。**【図12】**

岡田はこうした見解をもつに至った経緯に関して、「我が木村有香博士も此の技術に関して疾くより興味を有つて多くの資料を蒐めて居られるから、いづれ近い中に発表される所があると信ずる」とし、さらに続けて「…之」^{〔註19〕}（国内に残る印葉図）に就いては木村氏の示教に負う所^{すくな}尠ならず、殊に欧州に於ける事蹟に就いて貴重資料を与へられたことは感謝に堪へない」^{〔註19〕}と、この論文を書くに至るまでの研究経緯を明かしている。

つまりこの証言から、岡田要之助とは別に、ヤナギの分類研究で著名であった植物学者・木村有香^{ありか}（東北大学理学部教授、一九〇〇—一九九六）^{〔註20〕}もまた、印葉図について早くから興味をもち、内外の関係文献・資料の収集に力を入れていたことがわかるのである。岡田によるこの証言をそのまま敷衍すれば、岡田論文のなかでも特に「キノホフ」をはじめとしたヨーロッパの印葉図に関する歴史に関しては、木村から教示された内容である可能性が高い。おそらく岡田論文に記された西洋印葉図史に関する内容は、脚注に「木村氏蔵に依る」と明示されているErnst Fischer著の論文「自然物印刷の二〇〇年」（原題：Zweihundert Jahre Naturselbstdruck, 一九三三年）によるものである^{〔註21〕}。岡田は「木村有香博士も（…）いづれ近い中に（印葉図に関する論を）発表される所があると信ずる」と述べていたが、結局残念ながら木村による印葉図論が発表されることはなかったようである。管見の限り、木村による印葉図史論は確認できない。

さて岡田論文では、国内に伝存する印葉図の主たる作品として、現在の武田科学振興財団杏雨書屋に所蔵される幕末・明治初期の印葉図譜を四点あげると共に、加えてさらに注目すべき重要作品として、幕末期の飯沼慾斎『草木図説』（原本は個人蔵、稿本は一八五二年ま

でに成立か)と宇田川榕菴(一七九八—一八四六)筆写『キニーフ植物図譜』(一八二二年成立か、一卷、武田科学振興財団杏雨書屋蔵、貴二一五)の二つを挙げている。この飯沼慾斎と宇田川榕菴の両著に共通するのは、「キニーフ」こと、ヨハン・ヒエロニムス・クニフォフ (Johann Hieronymus KNIPHOF, 一七〇四—一七六三年)の植物標本集『植物印葉図譜』(原題: *Botanica in originali, seu Herbarium vivum*)【図13】から一部の図版が引用・模写されている点である(註22)。クニフォフの原書は、墨刷版と彩色版(手彩色がなされた)があるのだが、とくに榕菴の『キニーフ植物図譜』では彩色版が参照されたものと見られ、およそ三〇〇種類の図版が模写され、すべて筆彩されている(註23)。



【図13】ヨハン・ヒエロニムス・クニフォフ
『植物印葉図譜』1733年
(典拠: http://www.huh.harvard.edu/libraries/Hops/Humulus_lupidus_images.htm)

岡田は慾斎と榕菴の両著における印葉図模写に関して、その原本であるクニフォフ『植物印葉図譜』が「夫々別箇のものであったか、或は同一の書であったか、今之を審にするを得ないが、此書がその本国に於いてすら最上級の稀観書として認められ、当時すでに驚くべき高価を呼んでいた事実を鑑みれば、舶載せられたのは勿論極めて僅の数で、或は唯一部に過ぎなかったのではなからうか」と慎重に推察している(註24)。クニフォフの図譜がいつ日本に舶載し、その後誰の元に蔵され、その後どのように伝承されていたのかということは、岡田が論文を書いた一九四三年当時はもちろんこと、二一世紀となつたいま現在も明らかではない。

ただしこれについて補足しておく、二〇〇三年に川村典久氏によって報告された論文によると、クニフォフ『植物印葉図譜』の写本は、現在までに日本国内においては全部で六点(先の慾斎と榕菴の写本を含む)が確認されており、それぞれが別箇に作られてはいるものの、所載された図様には類似性がみられることから、おそらくは日本^{もたら}に齎されたクニフォフの原本には、およそ一〇〇〇種類の印葉図が所載されていたと推定できるといふ(註25)。しかしそれ以上に興味深いのは、これらの模写本のうち宇田川榕菴の『キニーフ植物図譜』を除き、五点の写本は全て墨のみで書き写されたものであるという点である。つまりこの事実がもう一方で示すのは、江戸末期までに日本に齎されたクニフォフ『植物印葉図譜』は墨刷版と彩色版の両方があった訳だが、宇田川榕菴だけが何等かに彩色版を目にすることができた状況にあった——ということなのである。

ところで、日本における水生昆虫学・陸水学研究的の先駆的研究者である上野益三(京都大学名誉教授、一九〇〇—一九八九)は、その大

著『日本博物学史』（一九七三年）を以て、令和となった現在でも最も信頼されるべき博物学史研究者である。上野もまた『日本博物学史』の中でクニフォフ『植物印葉図譜』について触れている（同書、一三二―一三三頁）が、その内容を精査してみると、やはり岡田論文を踏まえたものであることがわかる（註²⁶）。しかしそれだけに留まらず加えて、上野は独自に宇田川榕菴の著書『植学独語』（一八二七年頃執筆と推定）から、ある重要な一文を部分引用している。これは、「○
腊葉の外草木の真形を遠久に伝ふべき術ある事」と題した段落に表れる一文なのであるが、日本における印葉図史を考える上で極めて重要な証言を含む一文であると考えられるので、少し長いが榕菴の原文を以下そのまま引用してみよう。

「○腊葉の外草木の真形を遠久に伝ふべき術ある事

腊葉ハ全形を腊すれば、真形を存するに足るといへど、遠久に伝へがたし。物の真形全く存して、しかも伝遠不朽なるハ、写生の設色図にしくものなし。凡そ画図ハいかに拙くとも、却て能文の千百言を重たるに勝れり。百聞一見にしかずといふ語は実なり。然れども、画工の図は大抵丹青過実多く、或は態度点景にのみ拘りて、徒に婦女児輩の観物にすぎず、植学家の採用に充らず。ただ自ら生艸に對臨して其法を得べし。

①近世本邦にて希代の良法〔註・印葉図の方法〕を工夫せる人あり。此法真を存する事腊葉に勝り、且ツ遠久に伝ふべし。其法は先ズ生葉或ハ全苗を腊葉帖に挟み、一日或半日許壓し、取来て其片面に刷子にて黒肉を擁採し、これを木板に上せ、其上に浄紙を蓋ひ、掌にて紙上を擦れば、葉の形状鮮明に浄紙に移り、しかも②人工に写し得がたき微細の脉網、暈續の処さへ仔細に現れ、銅板図に異る

事なし。此方術西洋にもあり。浪華兼葭翁の藏せる和蘭腊葉の書といふハ是也と聞けり」

〔国立国会図書館蔵本（特一―二二―二）より、句読点・ふりがな引用者〕（註²⁷）

さて右の引用文の中で傍線を引いた箇所は、上野が著書の中で引用している箇所である。上野はまず傍線①の箇所について「榕菴は）印葉法を賞揚する」とし、すぐに②を引用して「：邦人の誰かのような発明のような書きかたであるが、実は西洋伝来の技法なのである。」と記し、印葉図の技術は日本古来には無く「西洋伝来の技法」だと断じてしまっているのである。だが、本当に先の榕菴の一文をそのように解釈してよいか疑問である。

まず榕菴が述べる「近世」とは、榕菴がこれを書いている「一八二七年頃」から見た「近世」である。実はこの語の解釈は曖昧で非常に難しい。おそらく意味的には二通りの解釈が可能で、一つは「今に近い過去」「近頃」「近時」という解釈。もう一つは、例えば『近世畸人伝』（二七九〇年刊行）のような書名で用いられた「近世」の語の意味で、そうであるならば、すなわちこの「近世」の語の意味は「江戸時代初期から榕菴がこれを書いている時代」までを意味していることになる。いずれにしても榕菴はここで、印葉図が一八〇〇年代に至るまでに日本人の「誰か」の手によって創意工夫されたという「伝承」を語っているのである。しかしそれが「誰なのか」という情報までは、榕菴は持ち得ていない。だが大事なことは、葉脈までもを精確に写し出すことができるこの技法は、同時に「西洋にもあり」という事実なのである。つまり榕菴は、日本において（すでに）存在していた印葉図の制作技法が、「西洋にも存在していた」という状況の一致を伝えているので

あり、これは印葉図技法が「西洋から日本に伝来した」という影響関係述べているものではないのである。——となれば、日本における「印葉図制作の方法」は、何等かに独自に編み出され、そして人々の間で「伝承されていた」歴史がうっすらと見えてくるのである。これこそが、ここで第一に注目すべき「印葉図」をめぐる新たな歴史観であろう。

さらに注目すべき第二点めとして、上野が引用箇所から外してしまった部分であるが、榕菴はこの段落の最終部において「浪華兼葭翁の蔵せる和蘭腊葉の書といふハ是也と聞けり」という興味深い伝聞を記している。つまり、あの江戸時代中期を代表する本草学者・木村兼葭堂（一七三六—一八〇二）が、「西洋伝来の印葉図譜」を所蔵していたという情報がここには記されている。文中には「和蘭腊葉」とあるが、これはいわゆる「押し葉標本」ではなく、押し葉を使った「印葉図」であったと榕菴は（伝聞ながら）証言しているのである。

この記載内容は、単なる噂として読み過ぎすことは簡単である。が、木村兼葭堂の没後、彼の蔵書が幕命によって昌平坂学問所に納められた事実があり、また一方で、一八二六年に幕府の天門方蛮書和解御用の翻訳員となった宇田川榕菴の事蹟を合わせ顧みると、榕菴自身が兼葭堂旧蔵書に何等かにアクセスできた可能性は、やはり否定できないだろう。もちろん先の引用文では、あくまでも榕菴は「伝聞」として兼葭堂旧蔵書の印葉図譜について書いている。しかし、一八〇二年の段階で兼葭堂は没している訳なので、兼葭堂が収集していたという西洋印葉図譜は、やはりクニフォフ『植物印葉図譜』のような、一七〇〇年代半ば以降のドイツで制作された印葉図譜であった可能性が高いだろう（註28）。ちなみに、オランダ語のみならず独語や英語にも精通していた宇田川榕菴ではあったが、例えば、元来ドイツ出身であっ

たシーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 一七九六—一八六六) をあえて「南和蘭人」と著作に記すなど、当時の政治的状況を鑑みて（オランダ人以外は出島への上陸が許可されなかったため）の配慮か、わざと誤記しているケースがある（註29）。従って、クニフォフ『植物印葉図譜』がドイツ語文献であることを知っていないながらも、ここではわざと「和蘭腊葉の書」と榕菴が記した可能性もあるだろう。

いずれにしても、残念ながら宇田川榕菴著『植学独語』に記載された「和蘭腊葉の書」については、これ以上の考察を深めることは難しい。だが木村兼葭堂という「十八世紀の大知識人」が印葉図という絵画手法を知り得ていたと事実が確かにあり、そしてさらにこの絵画手法が「江戸初期より存在していた」という史実の可能性を宇田川榕菴が示唆してくれている。これにより、長らく現代でも通説となっていた「日本における印葉図は十九世紀に誕生した」という言説は、当然ながら崩れることになる。

先に本論（上）編において筆者は、長澤蘆雪（一七五四—一七九九）筆「秋田路摺絵蟻図」という、明らかに十八世紀後半に制作された花鳥画作品を紹介したが、印葉図を二次創作したこのような絵画作品の背景に「すでに存在していた」という、「日本独自の印葉図の歴史」を、次に掘り起こしてみる必要があるのである。

（五）腊葉と印葉図——「日本最古の印葉図」に関する新知見

①「日本最古の腊葉標本」の再検討

先に引用した宇田川榕菴『植学独語』において、榕菴は印葉図を作成するため植物を「生葉或ハ全苗を腊葉帖に挟み、一日或半日許壓し」と、まずは「腊葉」にする手順を述べていた。つまり印葉図と「腊葉」

は、切っても切れないほど密接な関係にあるのである。植物学で言う「押し葉標本」とは、高等植物の標本の標準的な作り方のことで、正式にはこれを「腊葉標本^{さくよくぼうほん}」と言うのである。

現代では、植物の花や葉等を紙や本などに挟み込んで押し、平面状に乾燥させた素材を一般に「押し花」とか「押し葉」と呼ぶ。そしてこの自然素材を用いた作品として、栞やカード、絵はがき、アクセサリーなど、平面的な絵画芸術や立体物に貼付して装飾する創作方法が確立されている。こうした「押し花絵」あるいは「押し花アート」と呼ばれる絵画は、芸術学的には一種の「コラージュ」作品と解釈されるが、プロのアーティストから一般の趣味人に至るまで実に幅広く親しまれている。植物学で用いられてきた「腊葉標本」の技法は、この「押し花」の素材制作の方法と基本的には同じだと言われているのである。否むしろ「押し花」とは、植物学的な標本技術である「腊葉」を、芸術創作のために応用したものだと言ひ換えた方が妥当であろう。さて、日本ではつい二十五ほど前（一九九〇年代）まで、我が国ではいつ頃から「腊葉標本」が作られていたのか「はつきりしたことは判らない」とされてきた^{（註30）}。植物分類学・植物文化史研究者の大場秀章（一九四三—、東京大学名誉教授）氏は「ハーバリウム及び黎明期の日本植物研究」と題する論文の中で、「文政年間あるいはそれ以前に作製された押し葉標本の存在を筆者（＝大場）は知らない」と記している^{（註31）}。また大場氏は、著書『江戸の植物学』（一九九七年）の中で、「日本では本草学者が押し葉標本作製しはじめたのはシーボルトが来日（註・一八二三年八月）してからであった」（同書、二〇三頁）と述べるほか、「伊藤圭介や宇田川榕菴はシーボルトに会った後、植物採集に出かけ、押し葉標本をつくった」（註³²）とも、極めて断定的に述べている。おそらくその根拠となるのは、シーボルトが

オランダ商館長の江戸参府に随行した文政九（一八二六）年に、江戸への途次や日本橋の長崎屋で、数多くの日本人医学者・博物学者らと交流した事実が存在するからであろう。そうした日本人科学者たちの中に、当時を代表する医者・桂川甫周を筆頭に宇田川榕菴や伊藤圭介らが居たのである。

だがこの史実だけをもって、日本人本草学者たちの間で「腊葉標本」の製作が始められたのがこの時期である——という言説を固めることは問題であろう。なぜなら第一に、シーボルトは初めて宇田川榕菴と会った文政九年のこの出来事について、著書『江戸参府紀行』の中で、この時榕菴から多数の腊葉標本が贈られたことを述べ、その出来栄への見事さを賞賛しているからである^{（註33）}。つまり時系列に素直に考えれば、シーボルトとの面会以前に、すでに宇田川榕菴が腊葉標本の技術を獲得していたことは疑いないのである。

そして宇田川榕菴のような博物学者たちだけでなく、例えば同時代の博物学を愛好した大名たちの間でも「腊葉」あるいは「押し葉」標本の技術が、広く知られていた事実がある。以下、重要な作品を三つあげておきたい。

佐竹義文著『花葉集』

これまで科学史研究上ではほとんど注目されていないが、秋田藩・佐竹北家（角館城代）第十四代佐竹義文（一七七〇—一八二五）が著した『花葉集』二冊（文政三年、一八二〇年、秋田県・角館権細工伝承館蔵）は、彼が参勤交代の途次と江戸滞在中に蒐集した草花を、腊葉標本としてまとめた冊子体の植物図譜である^{（註34）}。この博物図譜は、かつて「千賀の紀行」（原本は現在所在不明）と題する義文自筆の随筆と共に伝わっていたことがわかっており、博物学的興味と文学

作品としての趣の、両方を兼ね備えた作品なのである。博物学的興味から実際の草花を蒐集したことは明らかであるが、同時に「旅日記」という文学創作の行為であったことは実に興味深い。なかに収められた腊葉植物はおよそ二六〇種類にわたり、一つ一つの採集月日や場所、種類名（漢名または和名）が義文自身の筆で書き入れられている。これらの腊葉標本は、文字通りの「花」や「葉」の部分が小さく手折られて「押し花」や「押し葉」とされている。体裁は、台紙となるページの紙の上に乾燥した「押し花」や「押し葉」を置き、その上からごく薄い和紙でページ全体を覆っているように見えるのだが【図14】実はそうではなく、一枚の和紙を漉くその手順の途中の段階で、一度薄く漉いた紙の上に「押し葉」や「押し花」を置き、さらに上からうっすらと表面を覆うようにして、もう一度紙を漉いているのである。つまり「押し葉」や「押し花」はごく薄い紙と紙の間に、いわばサンドイッチにされている状態なのである。これは現在「漉込み」と言われる制作方法の一つで、この方法を佐竹義文がどのように知り得ていたのかは明らかではない（註36）。しかも漉き込まれた「押し葉」や「押し花」は現在も虫食いや破損することなく、全て良好な状態で保たれている。二〇〇年ほどの時間を経過しながらその状態であることは、本当に驚きでしかない。この図譜の成立年代は、明らかにシーボルト初来日（一八二三年）以前である。「花葉集」の存在は、江戸の大名文化研究の資料としてはすでに一九五〇年代には知られていた（昭和三〇年に秋田県有形文化財に指定）が、残念ながら科学史研究の成果とは結びついてこなかったようである。他に類例を見ない腊葉標本であるだけに、その視点でもって改めて見直されるべき図譜であるだろう。

さらにこれに加えて、二〇一九年の現在では、江戸時代の腊葉標本に関し再考を要する新事実が次々と報告されている。なぜなら、二〇

〇〇年代に入ってから相次いで文政年間以前に作製された腊葉標本が発見され、それに伴い「日本最古の押し花」の製作年代が十九世紀はおろか、さらにそれ以前に次々と遡っている状況だからである。



【図14】 佐竹義文『花葉集』より ツユクサ・ヤマブキ他
1820年作成 秋田県・角館樺細工伝承館蔵

京極高永室・梅寿院旧蔵「京極家本押し花集」

二〇〇四年秋、兵庫県豊岡市で、但馬豊岡藩第五代・京極高永（一七二〇—一七六〇）の正室・梅寿院（肥後宇土藩第三代細川興生の娘「なを」）の遺品から、約七〇点の押し花（主にサクラやモミジ、シダなど）が発見された（註36）。これらは冊子帖に貼付された形状のもの他に、一種類ずつの草花が和紙で「包み」の状態にされたものなどがあり、それらには一つずつ種名や採取場所などの留め書きがされている。年記のあるものは享保六年（宝暦二年（一七二一—一七五二）で、おそらくはこの時期に収集されたものであることが判明したのである

（これらを便宜的に本論では「京極家本押し花集」と仮称）。博物図譜という「絵画」のかたちで花々が蒐集されたのと同様に、これらの押し花もまた、科学的な興味の元に「腊葉標本」として集められたことは想像に難くない【図15】。

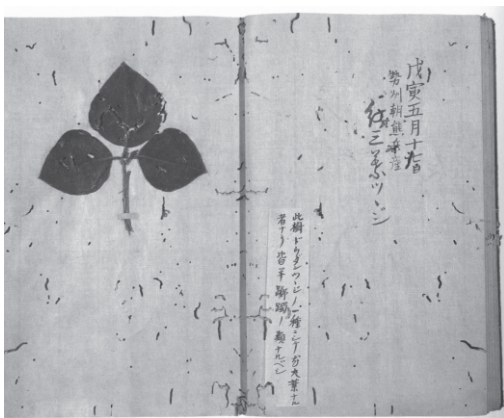


【図15】 京極高永室梅寿院旧蔵
「京極家本押し花集」（仮称）より 1721～1752年作成
兵庫県・豊岡市教育委員会保管

京極高永は、妻の兄弟である肥後宇土藩第五代藩主・細川興文（一七二三―一七八五）らと親しく交流したというが、その細川興文は本家である肥後藩第七代・細川重賢（一七二二―一七八五）に協力し、藩財政の立て直しと殖産興業に尽力したことが知られている。すでに周知の通り、歴史的に細川重賢は「肥後の鳳凰」と呼ばれた名君であるが、博物学史的にも重要であり、動植物に関する多くの博物図譜を多数制作した彼は、当時を代表する博物学大名であった。従って、細川興文はもとより京極高永やその妻である梅寿院の周辺にも、当時の博物学的流行は当然のものとしてあっただろう。先の七〇点にのぼる

「京極家本押し花集」は、そうした時代の文化的潮流の中で生まれたことは疑いない。

ちなみに昆虫写生帖の制作で有名な細川重賢にも植物図譜があり、今日一〇点が伝存している（すべて永青文庫蔵）。実はそのうちの三点が「腊葉標本」の植物図譜である。さらにそのなかの一点『押葉帖』には、宝暦八（一七五八）年の年記が確認されることも注意したい【図16】。一九九〇年代半ばには存在が確認されていた細川重賢の腊葉標本図譜だが（註37）、なぜかこれも日本植物学史研究上において、これまで注目されてこなかったことは実に不思議な点と言える。江戸中期の代表的な博物学大名・細川重賢が、彼もまた熱心に腊葉標本を作成していた事実は、改めて検証し直されるべきであろう。



【図16】 細川重賢作成『押葉帖』より ジングウツツジ
1758年 永青文庫蔵

諏訪高島藩士・渋江隼之丞の「渋江本押し葉・押し花」

さらに近年の報告（二〇一八年八月）であるが、先の「京極家本」

の制作時期をわずかに遡る押し花の事例が長野県で発見された^(註38)。諏訪高島藩第四代・諏訪忠虎(一六六三—一七三一)に仕えた御側小姓・渋江隼之丞という人物が作成した「押し葉・押し花」二五点である(諏訪市博物館に寄贈、便宜的にこれを「渋江本」と呼ぶ)。これらは、諏訪忠虎の大坂警護の任に渋江が同伴した際に大坂で収集したものともみられており、最も古い年記は、享保四(一七一九)年であるという。つまり先の「京極家本」と「渋江本」は、ほとんど同時期に制作されていたと言つてよい。そしてその事実が示す意味は、すなわち十八世紀前半までには「腊葉標本」の制作技術と方法が、博物学を愛好する人々のあいだ——とくに大名階級では一般化し、定着していたことを物語っているのである。そして、こうした事実を積み重ねてみるならば、やはり改めて再検討してみるべきは、十八世紀の江戸時代博物学の大ブームを牽引した博物学大名たちの事蹟と、彼らが遺した膨大な博物図譜や博物学関連の記録という資料の山を、改めてその視点で見直す必要があるだろう。それは同時に日本における「印葉図」の制作が、すでに十八世紀前半以前に始まっていた可能性をも確認することになるのである。

②十七世紀日本の腊葉標本・印葉図に関する新知見

さて、十八世紀における江戸博物学の隆盛の背景には、ターニングポイントに繋がる幾つかの重要な出来事が指摘されている。例えば明の李時珍(一五一八—一五九三)著『本草綱目』が林羅山(一五八三—一六五七)によって徳川家康に献上されたが、日本においてこれが広く用いられるためには六種類もの和刻本が作られた。朱子学者・貝原益軒(一六三〇—一七二四)はそのうちの一版を寛文十二(一六七二)年に手がけたが、さらに彼は中国本草学の範疇に飽き足らず、『本草

綱目』の内容を精査した上で「日本国内における本草」に関して研究を進めた。その成果が、我が国における初めての本格的な自然誌となる『大和本草』(宝永六年・一七〇九)十六巻の刊行である。『大和本草』は、李時珍の『本草綱目』から日本にも関係する千八百余りの動植物を抽出・記載すると共に、さらに『本草綱目』には所載されていない千百種類もの日本本草に関する重要事項を加えてある。それを可能にしたのは、益軒が膨大な『本草綱目』をものともせず読破・検討したことは当然のこと、彼自身が博物学者として実地に日本の野山を渉猟し、実体験と具体的採取という「情報収集」を行ったことが裏付けとしてあった。こうした益軒の実践的・実証主義的な態度は、その後の時代まで長く読まれ続けた彼の著作物を通じて、江戸時代博物学の基本的姿勢として多くの文化人たちの間に根付いていったのである^(註39)。

その一つの表れが、八代將軍吉宗の時代に至り全国の藩で起こった、『諸国産物帳』(以下「産物帳」と略称する)の制作である。『産物帳』は各地の物産品の名や由来を記した「本帳」と、註書き部分の「註書」、それに絵図を載せた「絵図帳」の三点で一セットとなっていた、一種の物産カタログである。『産物帳』は本草学者・丹羽正伯(一六九一—一七五六)が享保二〇(一七三五)年に全国の大名領、天領、寺社領に対して、隈なくそれぞれの領地内の産物について情報提供を要請したことに始まるものである。現在所在が確認される『産物帳』は、およそ百七十点余りと言われているが、一貫したフィールドワーク(実地採集)にもとづく膨大な絵図(絵画)と文字による記録は、当時の日本の様々な自然物の分布様態を知る上で、現代でも重要な情報源となっている。この一大事業は、一説には享保一七(一七三二)年頃、丹羽正伯が將軍吉宗より受けた命によって始まったとされるが、さら

にその要因には、正伯の師・稲生若水（一六五五—一七二五）の事蹟が関係していたと言われている（註40）。

本草学者で医学者そして儒学者でもあった稲生若水は、淀藩御典医であった父稲生恒軒に医学を学び、その後大坂で本草を福山徳潤に学んだ。京都では伊藤仁斎から古義学派の儒学も学んでいる。元禄期（一六八八—一七〇四）に入る頃、彼の学識の深さは広く世間に知られるところとなり、当時最も先鋭的に学問・教育に熱心であった大名、加賀藩第四代・前田綱紀（一六四三—一七二四）の聞き及ぶところとなったという。そして元禄六（一六九三）年、三九歳の若水は儒者として加賀藩に召抱えられることとなる。その後、藩主綱紀に「物類考」の編纂を申し出て採用され、李時珍『本草綱目』を補う博物書の編纂に若水は取り掛かる。これは、貝原益軒の『大和本草』が刊行される一〇年以上も前のことである。そしてついに『庶物類纂』編纂の下命を得る。これはまさにその後、弟子の丹羽正伯が編纂した『産物帳』の礎となるような仕事であった。

元禄十（一六九七）年に執筆が始められた『庶物類纂』は、三六二卷までを書き上げられたが、若水は正徳五（一七一五）年に六一歳で死去してしまう。この時『庶物類纂』は、全体の構想のまだ三分の一ほどしか完成していなかった。その後、八代將軍徳川吉宗がこれを話として聞き、若水の子・稲生新助や弟子である丹羽正伯らに『庶物類纂』の未完成部分の編纂を命じる。若水の遺志を継ぐこととなった正伯らは、享保十九年（一七三四）年より続編の編纂を開始。そして四年後の元文三年（一七三八）年に、ついに残りの六三八巻を書き上げ、総計約一〇〇〇巻にもわたる大著はこうして完成する。完成後、正伯はその制作を後援していた加賀藩に提出。そして加賀藩から幕府に『庶物類纂』は献納されたのだった（註41）。

いずれにしても、稲生若水が纏め上げようとした『庶物類纂』の学術的方向性は、それまでの漢方など薬学を中心とした本草学に加え、動植物全体を観察対象とする「博物学」への方向性を備えさせるものであった。つまり十八世紀後半に一大ブームとなる江戸博物学の潮流が、稲生若水や丹羽正伯らが遺した『庶物類纂』の偉業を発端とすることは、まず疑い得ないのである。そのように考えてくると、こうした博物学者たちの背中を押した学芸大名たち——ことに稲生若水を重用した名君・前田綱紀の周辺に残された博物学関連の資料群を、いまだ一度見直すべきであろう。

前田綱紀著『桑華字苑』と『丙寅旅中雜記』の印葉図

さて、明治以降に掛けて活躍した国文学者・福井久蔵（一八六七—一九五一）は、生前に『大日本歌学史』（一九二六年）や『大日本歌書綜覧』全五巻（一九二六年）また『連歌の史的的研究』（一九三〇年）など膨大な著作を残した国語学・歌学史の研究者である。今日その仕事は、『福井久蔵著作選集』全七巻（国書刊行会、一九八一年）と『福井久蔵和歌連歌著作選』全六巻（廣木一人編、クレス出版、二〇一一年）の二つの全集によってある程度纏まって知ることができるのだが、博物学史研究において重要な著作が全集からは抜け落ちてしまっている。それが、昭和十二年に刊行された『諸大名の学術と文芸の研究』二巻（厚生閣、一九三七年）である（註42）。本書は桃山末期～幕末期に至るまでの、数多くの大名たちの学問的・芸術的業績について実際の資料収集を元に著述された、大名文化史研究のバイブルとも言える書物であり、また古典籍を研究する上での重要な書誌としても知られている。この書の中で特に「第十 諸侯と科学（その二）」と題された章は、本草・博物学と江戸時代大名との関係についてかなりの紙数

を割いて記述されており、ほぼ時系列的に博物学史上注目すべき重要な事項や著作類(本草書や博物図譜など)に関して知ることができる。そうした中で、江戸時代「最初期」の博物学大名の筆頭に取りあげられているのが、加賀藩第四代・前田綱紀である。福井はその事蹟の重要性を端的に次のように綴っている。

「加賀前田綱紀が百萬の提封を擁し、明哲なる保科正之侯の後見輔導を受け、幼きより政治に、学問に、工藝に志を染め、天下の学者を用ゐて種々の類書を撰ましめられたるは水府の修史事業と並稱すべし。侯は寛文十一年西玄甫を助けて乾坤併説を訳出せし向井元升を用ゐて庖厨和名本草十三巻を撰ばしめ出版せられたるが如き、桑華字苑百巻を著し、また草木鳥獸図考の稿を起されたるが如き、特に稻生若水を登用して庶物類纂を撰ばしめたるが如き、流石に大藩主としてその規画遠大、学問藝術に深き興味を有せられたるを知るべし。庶物類纂に就きては後更に詳説すべし。」^(註43)

実は「名君」と呼ばれながら、早くから前田綱紀の業績は忘却されたという。若林喜三郎著『前田綱紀』(一九六一年)によれば、その状況は幕末の頃にはすでに顕著だったという^(註44)。明治四〇年代に書かれた近藤磐雄の大著『加賀松雲公』(上・中・下巻)、また藤岡作太郎著『松雲公小伝』の二つの綱紀伝(両著とも明治四二(一九〇九)年に上梓)には、共にこれについて触れられており、前田家が「幕府の嫌疑を避くるが為、凡そ封内の事は務めて外に流伝するを防ぎたり」^(註45)と、綱紀の事蹟を公に耀かすことを敢えて伏せていたことや、また一方で綱紀が多様な学問に秀で、かつ広汎の事業展開を行ったことに「専ら一事に固執して早く成果を収めしもの」にけお(「氣圧」さ

れる傾ありしなり」^(註46)であったことなど、内的・外的要因により、綱紀に対する客観的評価が阻まれてきた状況が論じられた。

ともあれ、博物学を中心とした前田綱紀の功績に関して言えば、福井久蔵による先の一文を改めて検討すべきであろう。これによれば、稻生若水の『庶物類纂』以前にも、綱紀は多くの学者たちを登用して本草関係文献の訳出や編纂を行っているが、中でも注目されるのは、『桑華字苑』百巻、および『草木鳥獸図考』と題する、博物学書の執筆に関してであろう。

まずここで小結論的に述べるのだが、前田綱紀のこうした著作類に關しての研究は、管見の限り令和時代となった現在もほとんど進んでいないのが現状である。あの上野益三著『日本博物学史』の中でも「綱紀は深く学問を愛し、図書の蒐集と編纂とに力をつくし、その蔵書の富は尊経閣文庫として著名である。自ら天文・地理・人事・動植物などの語義を注した『桑華字苑』、動植物の彩色写生図に考案を加えた『草木鳥獸図考』の著がある」(同書、三二三頁)と記されだけで、残念ながらそれ以上の考察は加えられていない。

そこで、明治四二年に共に上梓された近藤磐雄著『加賀松雲公』と藤岡作太郎著『松雲公小伝』を今回注意深く読み進めていったところ、『桑華字苑』に挿入された動植物の図版(モノクロ)写真【図17】のほか、何と前田綱紀自身が採集したとする植物の腊葉標本の写真(モノクロ)【図18】が、近藤・藤岡の両著共に(全く同じ写真原版を使用して)挿図として掲載されていた。両図版は共に当時の「侯爵前田家所蔵」(現在の公益財団法人前田育徳会)とされている。近藤による図版解説(近藤前掲書中巻、三九一頁)によれば、まず『桑華字苑』に挿入された動植物図は濃彩で、一部画工による図もあるが綱紀自身の筆になる図もあり、それぞれの図の脇に認められた留書き(説明書



【図 17】 前田綱紀『桑華字苑』挿入の博物図の写真（藤岡作太郎著『松雲公小伝』300—301 頁所載）



【図 18】 前田綱紀作成の腊葉標本の写真（藤岡作太郎著『松雲公小伝』300—301 頁所載）

き)は、綱紀自身の手になるものと判断している。また近藤は、綱紀の腊葉標本の解説(同書下巻、八九頁)で「松雲公の動物写生図數萬枚ありしを伝ふるに抛れば、採集標本の夥しき固より察するに難からず。而して今存する所、僅かに是類に止まり、惜しまざるべけん哉」と述べ、綱紀の腊葉標本が明治四二年の当時において、すでにほとんどが失われていたとも報告している。写真で見ると、これらの腊葉標本は台紙には貼付されてはおらず、一種類ずつが紙に包まれて保存されていたのである。このような方法であれば腊葉標本の多くは破損し、残らなかったことは致し方なかったであろう。

しかし大事な点は、このように相当量の腊葉標本が綱紀の元で作成され、それを集積していた事実が間違いなくあったということである。なおこの腊葉標本について藤岡は著書で「植物の標本はまた公の採集にかゝりて、包紙に草木鳥獸図考の文字あり、或いはこの儘に図考のうちに収めたるものか」と記している(藤岡前掲書、二九九頁)。つまり綱紀の博物図譜である大著『草木鳥獸図考』は、手描きによる動植物の絵図はもちろんのこと、文字による解説、そして植物については実物の腊葉標本をも付帯した、当時の博物図譜としては前例を見ない、壮かつ非常に緻密な作りの図譜であったことが徐々に見えてくるのである。ただし『草木鳥獸図考』については、近藤が調査した明治末期のこの時点ですでに四散し失われていたという。近藤もまた『草木鳥獸図考』が、往時は壮麗な博物図譜であったことに思いを馳せ、さらに以下のような証言も記している。

「『草木鳥獸図考』は動植物の写生にして、松雲公多年に渉り、画工をして濃彩の着色を以て模写せしめられしものたり。其数実に幾萬紙に達し、二合の長櫃中に充溢するに至りしといふ。編輯の費額

蓋し測るべからざる也。本書明治の初年に至るまでは長櫃と共に存在し、これを目睹せる故老輩今尚ほ健在するものありと雖も、廃藩の際、一朝其の踪跡を失し、散して民間に存する歟、将た藩邸焼失の時、烏有に帰したる歟、詳かならず。真に惜しむべしとなす。今挿牋に掲ぐるは、之と同種のものにして、公の桑華字苑に貼付せられしものにかかれり。」(近藤磐雄著『加賀松雲公』中巻、三九二頁)

さて、こうした明治期における前田綱紀の博物学書に関する研究を追っていたところ、私はそれとは別に、かつて昭和六三(一九八八)年十月に、綱紀に関連する展覧会が石川県金沢市・石川県立美術館で開かれたことを思い出した。これとても、すでに三〇年以上も前の展覧会である。

「加賀文化の華——前田綱紀展」と題したこの展覧会は、文字通り博覧強記の学芸大名・前田綱紀の足跡を、彼が蒐集し、遺した膨大な著作や美術資料等によって窺い知ろうとするものであった。そして、この時の展覧会カタログを今回改めて見直したところ、驚くべき事実を掲載図版から発見することになった。何と前田綱紀は植物の腊葉標本だけでなく、大量の「印葉図」も作成していたことが明らかだったのである。しかもこれらは、明らかに一六〇〇年代後半——つまり十七世紀後半に制作されたものであることが、綱紀自身が書き入れた年記から明白なのである。印葉図が挿入された資料は、先の『桑華字苑』(『桑華書志』を含む)と、綱紀の参勤交代中の日記である「丙寅旅中雑記」二卷(一六八六年)という資料である。

まず前者の資料は綱紀が日常において、彼の目に触れた物事や言葉进行分类し書き込んだ私的な雑記帳である(註47)。そこに、綱紀が目にした多くの動植物についても記述がなされており、色彩豊かな写生図

はもちろんのこと、それらと同時に墨摺りによる印葉図が多く挿入されているのである【図19】。カエデやサンキライ、シナノキ、モミジ等々、挿入された植物図の数やその種類については、今後詳細な調査をし直す必要があるが、収録された植物のほとんどは写生図が挿入されており、全部ではないがその多くの草や木の実物の「葉」部分が「印葉図」としても所収されている。『桑華字苑』は、元禄三（一六九〇）年～享保五（一七二〇）年まで、断続しながら書かれたものであることがわかつている（註48）。従ってこれらの印葉図も、ほとんどが同時に制作されたものと見て間違いないだろう。

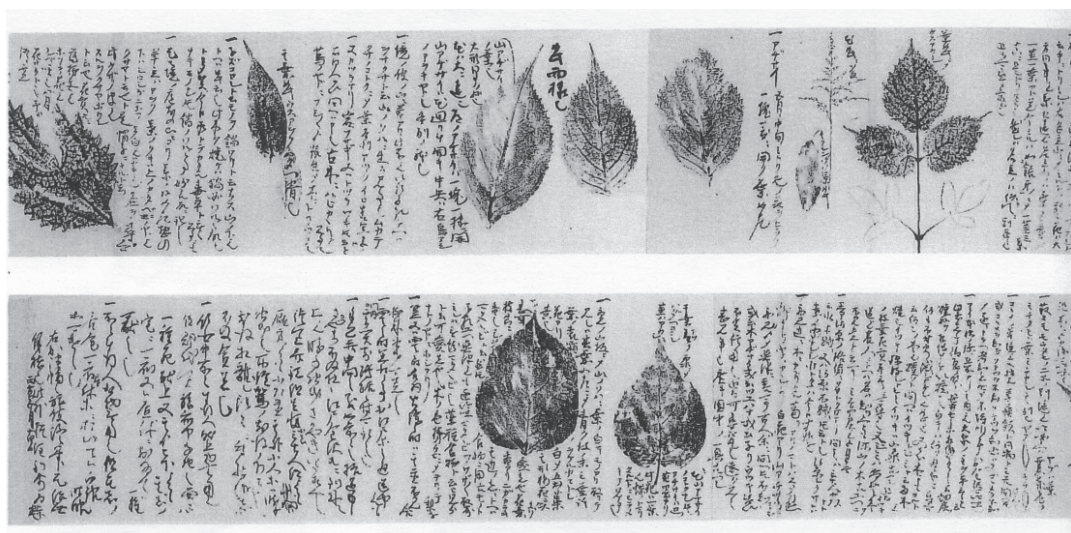


【図19】 前田綱紀『桑華字苑』挿入の印葉図
（石川県立美術館『加賀文化の華—前田綱紀展』カタログ、28頁掲載）

さらに後者の資料、「丙寅旅中雜記」二巻は、貞享三（一六八六）年五月に綱紀が参勤交代で江戸から金沢に赴く途次で、見聞きした事柄を詳細に自筆で記録したものである（註49）。しかしその内容の中心を占めるのは旅のこと以上に、実はほとんどが動植物に関する事で、綱紀は自らそれらを写生したり、あるいは「印葉図」を作成し、その両方をこの日誌に描き留めているのである【図20】。「丙寅旅中雜記」に所載された印葉図も、『桑華字苑』と同様に、全て墨摺りによるものである。おそらく旅中のことであるので、印葉図に用いられた草木の葉は一旦「押し葉」にした腊葉標本ではなく、道中その場で即時に記録するために、「生の標本」が使用されたことだろう（註50）。

このように『桑華書志』においても、また「丙寅旅中雜記」においても、蒐集した植物の記録として用いられた「印葉図」は、そこに描き入れられた写生図と全くの「同価値の記録」として扱われていたことが見て取れる。そして両資料についてはこれまで、博物学史的な研究対象として見做されてこなかったため、今後改めて、博物学史上における重要な資料の一つとして再調査と検証が必要だろう。ただし、もちろん私は綱紀の印葉図を以て「日本における印葉図制作の嚆矢とする」とは毛頭述べるつもりはない。だが、少なくとも小結論的には、本論において明らかにした事実を以て、日本における「腊葉標本」および「印葉図」の作成が、十七世紀後半まで遡及できることが証明されたと言えるのである。この新知見は、永く「日本における印葉図作成は文政年間以降に始まった」とされてきた植物学史上の見解を考え直すだけでなく、博物学をめぐる江戸の大名文化の、その層の厚みを再び照らし出す機会となるのである。

そうであれば、改めてあの巨大な「アキタブキ」を印葉図とした「落摺絵」という印葉図もまた、そうした大名文化との関わりの中で、再



【図20】 前田綱紀筆「丙寅旅中雑記」(二巻)挿入の印葉図
(石川県立美術館『加賀文化の華—前田綱紀展』カタログ、55頁掲載)

検証してみる必要があるかもしれない。長澤蘆雪が二次創作のための素材とした一枚の「露摺絵」であったが、考えてみれば、江戸時代における「アキタブキ」とは、羽後国秋田藩が誇った代表的な産物であり、また同地においては、古より数々の伝説と共に伝わる特別な植物なのである。一枚の古い「露摺絵」の背景に在ったその知られざる文化と歴史を、次にあらためて繙いてみることにしよう。

(以下、次号へ続く)

【註】

(註14) 岡田要之助「我國の植物印影図に就きて」(『植物及動物』第十一巻第八号、一九四三年八月) 三〇—三三頁。

なお、岡田の植物学者としての足跡については以下を参照した。

飯泉茂「岡田要之助先生と生態学」(『土壤微生物通信』第三四号、一九七一年八月) 一—四頁。

(註15)

①上野益三『日本博物学史』平凡社、一九七三年初版) 一三二—一三三頁。同書の本文中においては岡田要之助の名は直接的には表れてはいないが、「文献」項目(二七四頁)に同論文が挙げられている。同書における印葉図史に関する記述は、多くは岡田論文によるものとわかるが、一点だけ違うのは、宇田川榕菴著『植学独語』における印葉図法に関する記述を紹介している点である。これについては、本論文において後述する。なお近年の研究では、以下の論文が岡田論文の内容を最も詳細に記述している。

(註16)

②加藤傳重「ゲールツに贈られた伊藤圭介作製の印葉図譜」(『伊藤圭介日記 第十五集』名古屋市東山植物園、二〇〇九年) 二三三—二三七頁。三好学(みよしまなぶ)は、明治・昭和時代の植物学者。日本の植物学の基礎を築いた人物のひとりとして位置づけられている。大学院在学中の一八九一年にドイツに留学。ライプチヒ大学で植物生理学を学び、帰国後の一八九五年に帝国大学教授に就任。理学博士になる。論文・著作共にそれぞれ百篇以上と言われており、なかでも桜と菖蒲の研究に関して第一人者として知られた。とりわけ桜に関する主著『桜花図譜』(芸艸堂、

一九二一年)や『桜』(富山房、一九三八年)は植物学的にはもちろんのこと、桜をめぐる美術史・文化史的研究書としても重要である。そのため『桜博士』とも呼ばれた。さらに日本に「天然記念物」(デンクマール、denkmal)の概念を広めることや、また「景観」ということばの創出(地理学者・辻村太郎著『景観地理学講話』、地人書館、一九三七年)も、三好学によるものと指摘されている。

(註17) 註14岡田論文、三〇頁。

(註18) 同論文、三二頁。

(註19) 同、三〇頁。

(註20) 木村有香はヤナギの分類を大成した植物学者として知られると共に、旧制七高在学時代に原始的形態を持ち生きている化石として知られる「キムラグモ」を発見したことも著名である。木村が初代園長を勤めた東北大学植物園(現在の東北大学学術資源研究公開センター植物園)には、木村の蒐集した世界中のヤナギ科植物の標本木が現在も栽培されている。

(註21) Ernst Fischer. *Zweihundert Jahre Naturseibdruck in Gutenberg-Jahr* 1933. Mainz. pp.186-213

(註22) ヨハン・ヒエロニムス・クニフォフ(一七〇四—一七六三年)はドイツ・エンフルト出身の医師・植物学者。一七三七年にエルフルト大学教授となり、一七六一年から死するまでエルフルト大学学長を務めた。主著『植物印葉図譜』*Botanica in Originis*の初版は一七三三年に出版され、一七四七年と一七五八年に改訂増補版が出版されている。所載された植物はリンネの命名法で分類されており、図版はエルフルトの印刷業者、フンケ(Johann Michael Funcke)と開発した「Naturseibdruck」と呼ばれる植物標本(いわゆる「押し花」や「押し葉」)から直接版を作る技法で作られた。これが『印葉図技法』である。しかしその技術的方法の詳細は伝わっていない。

(註23) 岡田前掲論文、三二頁。

なお、宇田川榕菴筆写『キニーホフ植物図譜』の成立時期については、次の論文を参照した。

松田清・益満まを「神田佐野文庫所蔵 宇田川榕菴・辻蘭室筆「彩色ジャワ植物図譜」について」(『神田外語大学日本研究所紀要』第十一号、二〇一九年三月)二四二—二四三頁。

(註24) 同、三三頁。

(註25) 川村典久「伊藤圭介と印葉図」(名古屋市東山植物園『伊藤圭介の生涯とその業績』展カタログ、二〇〇三年)一〇四—一〇六頁。

(註26) 上野は『日本博物学史』一三三頁に掲載している「チョウセンアサガオの印葉図」に「Engelbより複写・木村有香氏の好意による」とキャプションしており、彼もまた岡田と同様に、木村有香よりFischer論文ほか西洋印葉図譜に関する資料提供を受けたものとみられる。ちなみにFischerが紹介したこの「チョウセンアサガオの印葉図」は、画中に記載された種名・分類ラベルの状態から、クニフォフの原著『植物印葉図譜』*Botanica in originis, seu Herbarium vivum*の中でも最も早い一七三三年版からの一図とみられる。

(註27) 宇田川榕菴『植学独語』については、現代語訳付の以下のような復刻本がある。

矢部一郎「復刻と訳・注 植学啓原」宇田川榕菴——付植学独語・菩多尼詞経(講談社、一九八〇年)。

(註28) 矢部一郎氏はこの「和蘭腊葉の書」を、クニフォフ『植物印葉図譜』であると断定されている(註27矢部前掲書、二一七頁)。

(註29) 「宇田川榕菴自叙年譜」(岡村千曳「紅毛文化史話」創元社、一九五三年)二七六頁。

(註30) 大場秀章「おし葉標本とハーバリウム」(同氏編『日本植物研究の歴史——小石川植物園三〇〇年の歩み』所収、東京大学総合研究博物館、一九九六年)六六頁。

(註31) 大場秀章「ハーバリウム及び黎明期の日本植物研究の歴史」(東京大学総合研究博物館データベース(展示図録)・大場秀章編「シーボルト日本植物コレクション」所収、二〇〇〇年、http://umdb.unm-tokyo.ac.jp/Dkankoub/Publish_db/2000Siebold/06/0600.html、二〇一九年九月一日取得)。

(註32) 註30大場論文、六六頁。

(註33) ジーボルト著・斎藤信訳「江戸参府紀行」(平凡社、一九六七年)一九一頁。

(註34) 佐竹義文「花葉集」(角館誌編集委員会編『角館誌 植物別巻』所収、角館誌刊行会、一九七二年)。

なお佐竹義文の父は、秋田蘭画派の中心的画家の一人でもあった佐竹義

躬（佐竹北家第十三代、一七四九—一八〇〇）である。義躬もまた佐竹義敦（号曙山、秋田久保田藩主第八代、一七四八—一七八五）や小田野直武（角館藩士、一七四九—一七八〇）らと同様に博物学に興味を抱き、ことに植物の写生図を残していることが知られている。また義躬は谷素外門下の「素盈」と号した俳人としても知られ、義文が俳諧に親しんだのは父の影響であることは間違いない。秋田蘭画派については以下を参照されたい。

今橋理子『秋田蘭画の近代——小田野直武「不忍池図」を読む』（東京大学出版会、二〇〇九年）。

（註35）

腊葉である「押し葉」や「押し花」を漉込みする和紙の製造は、現在では全国各地にみられ、その製法の起源が何時また誰の手によるものか、確定することはほとんど困難であると思われる。近年筆者は、伊勢津藩士で俳人・大島完来（一七四八—一八一七、雪中庵四代）が一句を認めた短冊に、このような「押し葉」が漉込みされた和紙が使用されている事例を見出した【図21】。制作年代は不詳であるが、佐竹義文『花葉集』の成立以前のものであることは、完来の没年からも明らかである。「家ひとり雨夜になりぬ涼み船 完来」と書かれた短冊には、シダの葉が漉込みされ、句の意に沿うような夏らしさが醸し出されている。切断されたシダの葉の形状から元は大きな一枚の料紙であったものが、あとから短冊としてその大きさに裁断されて使われたものとみられる。ちなみに、佐竹義文は江戸談林派の谷素外（一七一七—一八〇九）に師事し「坤麓」と号する俳人でもあった。俳諧を嗜む人々の間で、このような腊葉をあしらった料紙を愉しむ文化があったことも、『花葉集』成立の背景を考える上では重要であろう。



【図21】 シダの腊葉が漉込みされた短冊の例
大島完来筆 1800年代初め頃
個人蔵

（註36）

豊岡市教育委員会「よみがえる江戸の彩——日本最古の押花展」（但馬国府・国分寺館ニュース 特別号）二〇〇六年四月、http://www3.city.toyooka.jp/kokubunjikan/html/exhibit_past.html#mini-ktaku「二〇一九年九月一日取得」。

（註37）

小西正泰「細川重賢」（『彩色 江戸博物学集成』平凡社、一九九四年）一〇三—一〇五頁。

なお同書において、この重賢の腊葉標本が十八世紀に作成された事例であるという、重要な事実について指摘がされていない。

（註38）

「三〇〇年前の押し花、日本最古でした——長野藩士が採集」（依光隆明記者、『朝日新聞デジタル版』二〇一八年八月四日配信、<https://www.asahi.com/articles/ASL843ZL84U00B003.html>）二〇一九年九月一日取得）

（註39）

今橋理子『江戸の花鳥画——博物学をめぐる文化とその表象』（スカイドア、一九九五年）三〇—三四頁。

（註40）

同書、三四—三六頁。および安田健『諸国産物帳——丹羽正伯の人と仕事』晶文社、一九八七年）二四—二七頁。

（註41）

「諸国産物帳」に関しては、以下の文献も参照。
安田健「丹羽正伯」（『彩色 江戸博物学集成』平凡社、一九九四年）五四—七二頁。

（註42）

福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』二卷（初版は厚生閣、一九三七年）（復刻版、明治百年史叢書第二五〇巻、原書房、一九七六年）三三七—三四頁。

（註43）

同書、三三八頁。

（註44）

若林喜三郎『前田綱紀』（吉川弘文館、一九六二年）二〇二—二〇三頁。

（註45）

近藤磐雄『加賀松雲公』上巻（羽野知顕発行、一九〇九年）九—一〇頁。

（註46）

藤岡作太郎著『松雲公小伝』（高木亥三郎発行、一九〇九年）七頁。

（註47）

『加賀文化の華——前田綱紀展』カタログ（石川県立美術館、一九八八年一〇月）二三〇頁。

（註48）

同カタログ、二三〇頁。

（註49）

同、二〇二頁。

(註50)

博物学研究者の荒俣宏氏は「江戸博物学を拓いた大名」と題する一文の中で、前田綱紀の「桑華字苑」と「丙寅旅中雜記」の中に「葉脈拓本」が数多く挿入されていることを述べているが、十九世紀ヨーロッパの印葉図譜と比較して「(ヘンリー・) プラッドベリらのみごとな拓本に比べれば、前田綱紀のそれは、フィールドで手早く作成した粗雑な記録の域を出ない。しかし、ある程度の正確さを保持する図を、たちどころに、しかも自力で「写し取る」ことができる拓本術は、すばらしいアイデアであったといえる」と指摘している。しかしながら荒俣氏は、綱紀のこれらの「葉脈拓本」が、現代日本において確認される「最も古いその印葉図の作例」であることには気づいておられなかったようである。

ちなみに、荒俣氏は「印葉図」という用語を一切使用していない。「印葉図」はしばしば現代では「拓葉」とか「葉拓」などとも呼ばれることがあるが、管見の限り江戸時代にこれらの用語が使われた例をみないし、また植物学史でも「拓葉」「葉拓」という用語の使用例は見出されない。いずれにしても、植物学史や博物学史はもちろんのこと、美術史用語としてもこの分野の絵画表現を「印葉図」という用語で統一することが、今後の印葉図研究の進展の上で非常に大事な点と考える。

荒俣宏「江戸博物学を拓いた大名」(特集「前田家のコレクション」)(『北國文華』第一号、一九九八年六月) 一二八―一三四頁。

木谷文雄「前田綱紀と博物学——地方大名の壮大な計画」(同所載) 一三五―一四四頁。

〔追記〕本稿は二〇一九年度科学研究費(基盤研究C)による研究成果の一部である。

(本学教授)